第三章　義太夫劇の衰頽不振時代（寶暦―寶暦以後）

第一節　概　觀

寶暦元年、宗輔（千柳）先づ斃れ、同じく六年、出雲また次いで世を去つた。折柄さしもに全盛を誇つてゐた義太夫劇も、漸く下り坂へさしかかるに至つた。その原因を考へて見るに、何よりも作者にその人を得なかつたといへる。彼等は必要以上に複雜多岐な筋立を賣物にする所謂技巧派であるか、乃至は、前代諸作の書替によつて僅かに一時を凌がうとする徒輩に過ぎず、寛政以後には殆んど新作を見る事が出來なかつた。不振はひとり戯曲方面に於てばかりではなく、實は舞臺上の技術に於ても、何等進展を見るところがなかつた。卽ち作曲にあつてもいささかの新味なく、また人形操作に於ても、名人吉田文三郎が築き上げた領域を、全く越え

る事が出來なかつた。これらを一口にいへば、舞臺上のあらゆる點に亙つて進展力を失ひ、既に全面的に行詰つてゐたのである。そこへ、一方に於て、一時は義太夫劇の後陣を拜することを餘儀なくされてゐた歌舞伎が、反對に伸張して來た。作者にも並木正三・並木五瓶といふ工合に、相前後して有力な者が現はれた。更に江戸に於ては、櫻田治助をはじめとして、文化文政期に降つても四世鶴屋南北、次いで河竹默阿彌等の名作者が踵を接して登場した。他の一方の俳優にあつても、初代中村歌右衞門・初代嵐雛助・三世澤村宗十郎・四世松本幸四郎・五世市川團十郎等の名優がそれぞれ上方と江戸に輩出した。而も淨瑠璃中の當り作は、所謂「デンデン物」として屢〻歌舞伎へ吸收されてしまひ、斯樣にして、歌舞伎は文字通り淨瑠璃卽ち義太夫劇を壓倒して了つたのである。

今、義太夫劇の代表的劇場である竹豊兩座を見るに、竹本座は、貞享元年の創立以來八十四年目の明和四年を以て一度退轉し、明和八年に再興したものの、安永に這入ると氣息奄奄となり、豊竹座も亦、獨立した元祿十六年から六十三年目の明和二年に、竹本座に先んじて中絕するの已むなきに至り、明和四年再起はしたが、やがて衰滅して了つた。一方、江戸の操座も次第に衰頽に陷り、肥前座・外記座等相次いで衰亡に歸したのであつた。

第二節　近松半二

附、竹本三郎兵衞

さてこの衰頽不振時代に於て、義太夫劇掉尾の光を放ち、操の人氣を兎に角保持し得たにつけては、技巧派の大立物、竹本座の近松半二の力に俟つところが多かつたといはなければならぬ。

半二は近松門左衞門の友人、『難浪土産』の著者として知られた大阪の學者穗積以貫の子で、少くして放逸、竹田出雲の門に入つて淨瑠璃作者となつた。寶曆元年十月の作『役行者大峯櫻』に作者として始めて名を列ねてから作者生活三十三年、天明三年二月五十九歳を以て歿した。その作は總計五十四篇に及ぶが大部分は合作物である。舞臺技巧に長けて居り、その作品には今なほ歌舞伎に於て異彩を放つものが少くない。其の主なる作品は次ぎの如くである。

外題	興行年月	合作者
奥州安達原	寶曆十二年九月	竹田和泉・北窓後一・竹本三郎兵衞

京羽二重娘氣質	明和元年五月	竹本三郎兵衛
本朝二十四孝	明和三年正月	竹本三郎兵衛・三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七
太平記忠臣講釋	明和三年十月	竹本三郎兵衛・三好松洛・竹田文吾・竹田小出・筑田平七
關取千兩幟	明和四年八月	竹本三郎兵衛・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七
傾城阿波の鳴門	明和五年六月	竹本三郎兵衛・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉
近江源氏先陣館	明和六年十二月	竹本三郎兵衛・八民平七・松田才二・三好松洛　竹田新松・近松東南
妹背山婦女庭訓（おんな ていきん）	明和八年正月	松田ばく・榮善平・近松東南・三好松洛（後見）
新版歌祭文	安永九年九月	なし
伊賀越道中雙六	天明三年四月	近松加作

次に、二三の傑作に就て、説明を加へて置かう。

先づ『本朝廿四孝』をとりあげよう。

明和三年正月十四日から竹本座で上場した。「武田信玄・長尾謙信」と角書になつてゐる。本曲は藍本として近松の『信州川中島合戰』を採り、傍ら『三軍桔梗原』（延享二年、櫻井賴母等作）『甲斐源氏櫻軍配』（寶暦六年、淺田一鳥等作）等の諸作の作意をも參酌した上に更に半二式の技巧

を凝らして作り上げたもので、筋が複雜を極めて居る上に、覆面の人物や疑問の曲者を澤山に働かせてある點に於て、恐らくは技巧澤山の院本中の典型といつてよからうと思ふ。

本曲の仕組は非常に入込んで居るが、筋をほぐして要點をいへば、次のやうである。種子島の一發で將軍義晴を射殺して逐電した井上新左衞門、諏訪明神鳥居前の力石の下より顯れる曲者、上杉家の花作り關兵衞と、斯う姿を變へて、足利家を滅し天下を覆さうと企てて居る美濃の齋藤道三が本曲に於ける事件紛糾の黑幕で、これに腹黑き北條氏時と村上左衞門とを取合せて、彼等の奸計によつて、諏訪法性の兜の事で不和の武田・上杉の確執はいよいよ高まると共に、將軍暗殺者を捕へ得なければ三年後には切腹と、その兩親によつて誓はれた勝賴と景勝は拔差ならぬ羽目になつて行く。兩人共に身代りの必要に迫られた。景勝と慈悲藏の直江山城とは、慈悲藏の兄横藏を召抱へて身代りにしようとしたが、横藏はそれには餘りに深慮大望の士であつた。義晴が暗殺された時にその胤を懷姙して居る賤の方を奪ひ去つた覆面の人物は彼であつた。諏訪明神の力石で勇力を示して曲者から蓑を得たのも彼であつた。彼は夙に武田信玄と肝膽相照らし、その內命によつて、足利家の若君を我が子として育てて居た山本勘助であつた。扨また一方に於て武田家に於ては、勝賴の傅板垣兵部は主家横領の底意を以て勝賴と我が

子とを取代へて置いたが、天運といはうか、苦心した身代りの蓑作は間に合はずに我が子が切腹した。かくして勝頼ならぬ勝頼は偶然身代りの役をつとめて、眞の勝頼なる蓑作は却つて上杉の館に花作りとなつて入り込む事となる。そしてこの間に二人の勝頼をめぐつて濡衣と八重垣姫との戀が展開され、結局濡衣は義晴の御臺を狙つて居る己が實父道三の爲に御臺の身代りに立ち、法性の兜は八重垣姫の働で武田家に戻り、事件の口火を切つた道三は萬事休して切腹し、北條・村上も捕へられて兩家は和解するといふ恐ろしく組んだ趣向である。

山本勘介が關兵衛の正體を觀破したのは、諏訪明神の力石の下から顯はれた時に「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき」といふ歌と共にその身につけた菅蓑を後日再會の證にと渡されたので、この歌の作者たる太田道灌の後裔であつて、領國美濃を足利氏に奪はれたのを怨んで居る齋藤道三たる事は「みの一つだになきぞ悲しき」によつて覺つたとは、恐らく院本作者の味噌の上乘なるものであらう。題名は本曲の山たる勘助住家の筍掘りに基くことは言ふ迄もあるまい。

全篇の場割りを表示すれば次のやうになる。

初段
- 口……室町館の場（賤の方懐胎の祝、武田上杉確執が問題となる。義晴の上意で勝頼と八重垣姫との婚約をさせる――四段目への伏線）
- 中……誓願寺茶店の場（直江山城と賤の方の腰元八つ橋の不義問題）
- 切……室町奥御殿（義晴の暗殺、賤の方の奪取、曲者の投げた小柄が三段目伏線。直江八つ橋の追放。これも三段目へ聯絡、上杉武田の誓言。）

二段目
- 口……下諏訪明神の場（兵部蓑作召抱、濡衣百度参り、横藏曲者出會）
- 切……信玄館の場（勝頼の切腹）

三段目
- 口……桔梗ヶ原の場（境目争ひ、捨兒）
- 切……勘介住家（景勝下駄の場、筍掘り、横藏の物語）

四段目
- 道行……（蓑作と濡衣との信濃への藥賣となつての道行）
- 口……和田山村上館（百物語、村上狐にばかさる）
- 切……謙信館（十種香、狐火、道三最期）

五段目……大團圓

三段目の口の桔梗原に於ける境界爭は、近松の『津國女夫池』の第二段の境界爭からの脱化らしく、勘介住家は『川中島合戰』の輝虎配膳の場の翻案たることは明かである。

この淨瑠璃興行の際、第四段目に於て見物席をはすに引割御殿をせり上げ、古今の大道具で

大入であつた。その後、操でも度々繰り返されたのみでなく、同じく明和三年五月大阪の中座で初めて上演されて以來、歌舞伎でも長く屢〻演ぜられるに至つた。

次に、『近江源氏先陣館』に就て述べよう。明和六年十二月九日から再興の竹本座興行。作者としては前記の如く半二を筆頭に八民平七・松田才二・三好松洛・竹田新松・近松東南・竹本三郎兵衛等の名を連ねて居るが、再版の正本には半二・平七・三郎兵衛の名を掲げて居るのみである。この中半二が立作者たるは言ふ迄もない。

史劇の絶好材題の一つともいふべき豊臣氏の末路が劇に仕組まれるに至つたのは、江戸の後期からの事であつた。それとても難波戰記などのやうな、これに關する戰記などに基く脚色でも露骨な人名を以てしては其筋から容易に許されない。そこで忠臣藏や島原合戰や、又は由井正雪などと同じく世界を昔に取つた。寶永七年正月（？）豊竹座上場と傳へられる紀海音の作の『賴光新跡目論』を筆頭に、享保三年正月から豊竹座で上場された同じく海音の作『義經新高館』、並木宗輔の『南蠻鐵後藤目貫』（享保二十年二月豊竹座上場）、この作を加筆改題した『義經新含狀』（延享元年三月江戸・肥前座）更に十一年後の寶暦四年七月には、豊竹座でこの改作たる『義經腰越狀』（並木宗輔の補筆）が興行された。斯の如く、大阪陣を題材として、豊臣氏に同情を寄

せて作られた戯曲は、その間相當にその筋の壓迫を蒙つたに拘らず、手を代へ品を代へて舞臺に現れた。そのあとを受けて作られ、そして又名作として後迄も持囃されたのは實にこの『近江源氏先陣館』である。本曲は上記の諸篇を藍本として技巧を凝らしたものである。世界を鎌倉時代に取り、近江の坂本城を大阪城に擬し、近江源氏の嫡流たる佐々木三郎盛綱と弟四郎高綱とが敵味方と相分れ、義によつて骨肉相戰ふ處に山を設けて、これに片岡造酒之頭が源氏と北條とを結ぶ爲に時政の女時姫と賴家とを緣組させようとする苦心、時姫は三浦之助吉村を戀して居る事、坂本城に於ては大江入道藤澤藏人等が宇治の方と賴家母子を亡き者にしようと奸計をめぐらして造酒之頭を斥ける事、造酒之頭の志を繼ぐ三浦之助は、四斗兵衞と呼ばれる大酒漢實は和田兵衞秀盛といふ智勇兼備の豪傑を坂本城の軍師に招聘し、彼はその意氣に感じて働く事などを取合せて九段に仕立ててある。その場割は次の通りである。

第一鎌倉御殿の段、第二東大寺の段、第三賴家館の段、第四道行旅路のぬれ衣、第五高宮茶屋の段、第六四斗兵衞住家の段、第七坂本城の段、第八盛綱陣屋の段、第九佐々木船長より和睦迄。この中で名高いのは第六と第八との兩段であつて、第六段は『南蠻鐵後藤目貫』以來の豪快な場面を以て勝れ、第八段は身代り首實檢の最も技巧を凝らされたるものとして、作者の

技倆を窺ふに足る場面である。

本曲が始めて歌舞伎で演じられたのは、明和七年五月十三日からの大阪中座の興行で、盛綱三桝大五郎、三浦之助小川吉太郎、四斗兵衛藤川八藏、高綱・時政中山文七等の顔ぶれであつた。

本曲初演の翌年なる明和七年五月廿二日から同じく竹田新松座に於て『太平頭鍪飾』を上場した處が、興行禁止を命ぜられて六月十六日限りで中止した。爲に正本も出版されなかつたが、番附によつて見れば『近江源氏先陣館』の改作らしく思はれる。なほ又これより後に作られた『鎌倉三代記』（天明元年三月）や、近松やなぎ等作の『日本賢女鑑』（寛政六年十月）や、近松梅枝軒等作『鳰湖高名硯』等も亦同じく豊臣氏の末路を材題としたもので、共に『近江源氏先陣館』の影響を少からず受けて居る。

次に、『十三鐘絹懸柳　妹背山婦女庭訓』を見よう。

初代義太夫が旗上げをしてから八十餘年連綿として續いた竹本座が、先に書いた如く明和四年に一度退轉し、明和六年十二月、竹田新松が座本として再興し『近江源氏先陣館』を出したが、それ以來も兎角振はずして、窮餘の策として明和七年秋、三代目吉田文三郎冠子を江戸

から呼下し、江戸で好評のあつた『矢口渡』を出したが、これもさしたる反響もなく、竹本座もまたまた廢座の運命に迫つた時に、半二が一生の智惠を絞つてこの『妹背山』を作り、特に山の段の定香を當時賣出しの春太夫に、大判事を名人の聞えある染太夫に語らせて大好評を博し、四五年來の不入を一時に取返して、座の旗色が立直つた淨瑠璃であつたといはれる。それゆゑ故饗庭篁村翁は曰く、「此の作は半二一代の手柄のみにあらず、竹本座再興の獨參湯ともいふべきなり」と。

思ふに本曲は結構の雄大にして、種々の傳說趣向の巧みに利用せられ、巧妙複雜なる技巧の極致を示して居る點に於て正に淨瑠璃王代物中の雄篇名作の一つと謂つて差支ないであらう。

鎌足が入鹿を滅した事件及び珠取海士の傳說を材とした戲曲としては、謠曲『海士』以下かなりの數に上るが、半二はかかる大織冠物の中から特に入鹿討伐の方面の材料を求めた上に、更に大和に於て古來有名な傳說で既に淨瑠璃や歌舞伎にも仕組まれた事のある采女の絹掛柳の傳說、神鹿殺しの科としての石子詰の十三鐘の說話及び謠曲『三輪』の苧環の傳說等を巧に取入れて一篇の趣向を凝らして居る。而して是等の多くの說話傳說を活用する爲に、作者は先づ、筋立の必要上惡の權化ともいふべき超人間的の力を有する入鹿の生立について次のやうな宿命

的の因緣を與へて居る。彼の父蘇我の蝦夷が、齡傾く頃迄も一子なきを憂へて時の博士に占はせ、白き牡鹿の生血を取り、之を母に與へたその驗として健かなる男子が出世した、鹿の生血が胎内に入つたによつて入鹿と名づけたのであるといふ。それ故彼が心をとろかして、その所持する寶劍を奪還してその上で彼を誅伐するには、爪黑の鹿の血汐と疑著の相ある女の生血とを混じて鹿笛に注ぎかけて吹く時は秋鹿が妻戀ふ如く自然と鹿の性質が顯れて、その色音を感じて正體が無くなるのである。それゆゑ入鹿討伐に粉骨する淡海とその腹心の者とは、この最後の目的を達する爲に働いた。卽ち獵師芝六は我が子の三作が石子詰になるのも厭はずに禁を犯して爪黑の鹿の血汐を得た。漁師鱶七の金輪五郎は戀に狂ふ可憐なるお三輪を疑著の相ある女として殺し、而して淡海を中心として戀を爭ふ橘姫とお三輪との三人を入鹿の館にたぐり寄せて、二女の犧牲によつて宿志を遂げさせるべきの機緣を作る爲に、苧環の糸は繰られるといふ趣向になつて居るのである。のみならず天智天皇と采女とを入鹿の毒手から救ふ爲に、絹掛柳の傳說の翻案が用ゐられて居る。そしてこれが一つの動機となつて相愛の久我之助と雛鳥とは、その親と親との和解し難き爭を象徵するかの如き越え難き吉野川を隔てて、侍の體面と女の操との爲に自害して、彼等の悲しき戀を蕾のままに永久に吉野の川瀨に流し去るのである。

かういふ複雑な趣向が、尚その上に補助的の筋立や挿話が伴ひつつ、第一段第二段のそれぞれの場面の間に適宜に伏せられて、それが三段目四段目の葛藤の山を越えて次第にほぐれて、最後に至つて漸く全部が明かされるといふ仕組であるから、筋を辿る上に於ては隨分厄介千萬である。その場割りを簡單に表示すれば次のやうである。

初段
- 大序…大内の場
- 中……春日野小松原の場（久我之助と雛鳥との濡れ場、三段目への伏線）
- 詰……
  - 口……蝦夷自害の場
  - 切……入鹿入定の場（入鹿の本心明し）

二段目
- 口……猿澤池の場（絹掛柳）
- 中……つゞら山鹿殺しの場
- 切……芝六住居の段（かけ乞、萬歳、十三鐘）

三段目
- 口……定香館
- 中……花渡し
- 切……山の殿

口……井戸がへの場
次……杉酒屋の場
四段目
道行
奥……御殿の段（橘姫歸館、鱶七上使、竹に雀、奥御殿）
跡……鹿退治
五段目……大團圓

本曲に於ては三段目切山の段が最も舞臺技巧を弄した有名な場面であるが、これは近松の『信州川中島合戰』（享保六年）の第四段目山の段から脱化したものであらうかと考へられる。歌舞伎ではじめて演じられたのは、操での初演と同じ年に大阪の小川座で興行したものであり、江戸では安永七年春森田座ではじめて興行された。

最後に、半二の作中でも名高いものの一であり、且、珍くも單獨作である『久松（おそめ）新版歌祭文』を擧げよう。

本曲は、海音の『袂の白しぼり』及び改作たる『染模樣妹背門松』を粉本として作つたもので、半二は原作に於ては單に野崎村の百姓久作の子となつて居る久松に對して次のやうな素性

を持たせた。

和泉の石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は、主君の重寶吉光の短刀を預つて居たのを盜まれたので、阿房拂に逢ふのが無念さに切腹して、その家來三平が介錯し、三平は追腹を切つた。その時丈太夫には六つになる孤兒があつた。三平の妻でこの兒の乳母であつたお庄は、その兒である野崎村の久作にその兒の養育を賴んだ。久松と呼ばれたその子は、十歳の年行儀見習のために大阪瓦屋橋の油屋へ奉公に行つた。久作は後妻の連れ兒のお光と久松とを夫婦にさせようと思つて居た。久松を兒に託したお庄は吉光の短刀を手に入れるを條件として、主家再興を家老に歎願して刀の搜索に憂き身をやつして居る。

かういふ境遇にあつた久松が、父の横死後十三年目の暮にお染と情死する事件を脚色したのが本曲である。原作よりは背景が複雜であり、出て來る人物の間にからくりの糸がそれからそれへと引掛けられて居つて、半二式の技巧澤山の世話物の特徵が最もよく出て居る作である。場面としては野崎村の段が勝れて居る事はいふ迄もなく、ここには半二の舞臺藝術家としての手腕が最もよくあらはれて居る。

尙、半二との合作者として、最も有力な存在だつたと考へられる竹本三郎兵衞に就て、ここ

で簡單に言ひ添へて置かう。

三郎兵衞は人形遣二代目吉田三郎兵衞のことである。名人吉田文三郎の子で、初め吉田文吾と稱へ竹本座へ出勤して居た。寶曆九年閏七月父と共に一時竹本座を退いたが、同年九月自分だけ復歸し、吉田三郎兵衞と改めて出座し、同時に竹本三郎兵衞と稱へて作者をも兼ねた。尤も、一時退座する前の寶曆九年二月に、『日高川入相花王』を竹田小出雲・近松半二等と竹本三郎兵衞の名で合作したのが作者生活の第一歩であつた。爾來、作品三十餘篇を數へるが、單獨作は一篇のみにて他は合作であり、主として近松半二との合作物に有名なものが多く、技巧派中の一人である。安永元年十二月豐竹座上演の『艶容女舞衣』以後の正本にはその名が見えない。歿年は未詳である。

第三節　其他の作者

半二・三郎兵衛の如き竹本座系の作者に對して、豐竹座系の作者としては、菅專助・若竹笛躬等を擧げることが出來る。しかし、兩人合作の『攝州合邦辻』（安永二年二月、北堀江座）が「愛護若」系の淨瑠璃として異色ある一篇であるぐらゐで、他の名を得た作は殆んど書替物である。即ち、專助の『染模樣妹背門松』（明和四年十二月、北堀江座）は『袂の白しぼり』の、同じく專助の助六淨瑠璃『紙子仕立兩面鑑』（明和五年十二月、北堀江座）は『萬屋助六二代禘』の、それぞれ書替である。また、兩人の八百屋お七劇『伊達娘戀緋鹿子』（安永二年四月、北堀江座）は『潤色江戸紫』の、『けいせい戀飛脚』（安永二年十二月、曾根崎新地芝居）は『冥途の飛脚』の、これまたそれぞれ書替物であり、中にはむしろ改惡となつたものさへなくはない。彼等の想が如何に枯渴してゐたかが窺はれようと思ふ。

かうした時にあつて、むしろ注意すべきは、江戸の福內鬼外であつた。福內鬼外は、かの平賀源內の淨瑠璃作者としての戯號である。讃岐志度の浦の人。名は國倫、字は土彝、鳩溪と號

し、又戯作者名を風來山人・天竺浪人・森羅萬象などともいつた。彼の傳記、彼の多方面に亙つての活動については、世に知られて居る事故ここには省略し、彼の筆になる淨瑠璃の外題名と、その興行座及び初日を左に列擧するに止めて置く。

神靈矢口渡	明和七年正月十六日	外記座
源氏大草紙	明和七年八月十九日	肥前座
弓勢智勇湊	明和八年正月廿日	肥前座
嫩葉相生源氏	安永二年四月卅日	肥前座
前太平記古跡鑑	安永三年正月十二日	結城座
忠臣伊呂波實記	安永四月七月十五日	肥前座
矢口後日荒御靈新田神德	安永八年二月八日	結城座
靈驗宮戸川	安永九年三月三日	肥前座
實生源氏金王櫻	寛政十一年正月	肥前座

以上の九篇がある。中には吉田仲二（二一と同人か）や二世森羅萬象（源平藤橘）が手傳つたのもあるが、大部分は鬼外の筆である。而して鬼外が歿したのは安永八年十二月十八日であると

も、又は安永九年二月十八日牢死すとも傳へられて居るが、兎に角『靈驗宮戸川』は彼の歿後に興行されたものといふべきである。殊に『實生源氏金王櫻』に至つては、ずつと後になつて興行されると共に正本も刊行されたもので、「故人福内鬼外遺作」として、三段目迄を出し、その正本表紙見返しの太夫役割附の四段目以下の空白欄に「福内鬼外故人に成申候故此跡出來不申候御斷申上候　座本」と記入してある。

何れにせよ、彼は江戸淨瑠璃作者としてその第一人者であり、殊に『神靈矢口渡』は最も人口に膾炙してゐる。この說話は『太平記』第三十三卷の「新田左兵衞佐義興自害の事」の條に詳しい。これ卽ち矢口明神緣起の原據であるが、材題をここに求めて脚色したのである。作者は本曲を作るに至つたのは、矢口明神の神主の依囑によつたとか、紀上太郎の慫慂に基くとか、吉田冠子の發意であるかといふやうに、色々の宣傳めいた言傳へもあり、また舞臺に上せても江戸の民衆から喝采された程で頗る有名な淨瑠璃である。併し一代の才人平賀源內の作品として見れば、彼特有の辛辣なる諷刺も皮肉もなく、平凡な類型的の構想と趣向とに墮した淨瑠璃たるに止つて居る。併し淨瑠璃作者福內鬼外の作としては代表作である。自然、江戸作者の淨瑠璃中の名作であるのみならず、義太夫淨瑠璃といへば大阪中心であつたのに對して、場所も

出來事もその重要なる部分は江戸附近である上に、江戸の作者の手によつて、所謂江戸前の呼吸で綴られたものとして注目すべき作品であると謂つてよい。

尙、江戸作者として、もう一人、紀上太郎を加へておかう。彼は南家三井の主人。名は治郎右衞門高業、字は公勤。鯛屋貞柳の門下で仙果亭嘉栗と號し、別に四貫・由甲等の號がある。浪華に生れて江戸に出た。和漢の學に通じ、書畫をよくし、狂歌に堪能であつた。幕府の爲替用達を勤めて江戸駿河町に住んだ。紀上太郎と號し平賀源內・平秩東作・大田南畝等と往來して淨瑠璃を作つた。寬政十一年四月二十四日歿す、年五十三。

安永五年八月一日より江戸外記座に於て上演された『志賀の敵討』を單獨で書き、之が處女作である。其他、同六年三月『絲櫻本町育』を達田辨二の補助を受けて作つたが、最も後世に有名な作品であり、同九年正月には、『碁太平記白石噺』を烏亭焉馬等と合作したが、その中で第一及び第四（田植の段）第五（逆井村の段）、第八（屋敷の段）、第九道行、第十、第十一（紺屋の段）は上太郎の筆になつて居り、尙、第八は三津環と云ふ替名を使用してゐる。